

大连理工大学二〇〇五年硕士生入学考试

第 1 页

《 翻译与写作 (日) 》 试题

共 4 页

注: 答题必须注明题号答在答题纸上, 否则试卷作废!

第一部分

设问 1 次の文を読んで後の問いに答えなさい。

日本語の「は」はその用法を二つに分けることができる。  
一つは主題を示す用法である。

(1) 私は、昨日、午後 1 時に、京都にいなかった。

主題とは、森羅万象の中から、それについて述べるべき対象として、話の場を示されたもののことである。「題目」「トピック」などと呼ばれることもある。主題は文の最初にもち出される大前提であり、それに続く部分は、それについての解説・説明になる。主題について述べている部分を叙述 (部) と呼び、主題と叙述との関係を題述関係といい、題述関係によって成り立つ文を題述文という。

「は」のもう一つの用法は、対比的とりたてである。

(2) 私は、昨日は、午後 1 時には、京都には、いなかった。

このような「は」は、叙述部中のその部分を、あとの叙述の小前提として示すもので、そうすれば、その部分は必然的に、それと同種の他のものとの対比の意を含んでくることになるのである。(佐治圭三、「構文—主語・主題・述語等—」より抜粋)

問 1 本文の内容を参照しつつ、「は」と「が」の使い分けの実例を一つ挙げて、日本語で説明しなさい。(10 点)

問 2 日本語の「主語」に関する議論について、知るところを日本語で説明しなさい。(10 点)

問 3 以下の文の下線部を「が」に置き換えると、一般に誤りの文となってしまう。その理由について日本語で説明しなさい。(10 点)

では、そのほかの人達はどうでしたか?

设问 2 以下の日本語は中国語を母語とする日本語学習者が作文したものである。この文について以下の問いに答えなさい。

彼は日本語の学習するために、1 年間日本に留学した。

問 1 誤りの部分を指摘しなさい。(5 点)

問 2 誤りを起こした理由を「言語転移」の観点から日本語で説明しなさい。(10 点)

設問 3 以下の用語について、具体的な例を示しながら中国語で説明しなさい。(20 点)

1. 時制
2. モーラ
3. 法
4. 破擦音
5. 後置詞

設問 4 以下の文を読んで後の問いに答えなさい。

当代语言科学解释人类的语言现象大体上说有两条路子和两种理论前提。一种是形式语言学理论，主要是建立一套形式化的原则和规则系统，试图从语言结构内部寻找对语言现象的解释；还有一种就是认知语言学理论，主要是提出一套心理分析的手段，试图从语言外部去寻找对语言现象的解释。如果说形式语言学理论把语言学比作物理学，认为语言结构的规律就跟物质的构造规律一样无需从物质外部去寻找解释；那么认知语言学理论就认为语言学跟生物学更相似，因为生物的构造部件和构造方式无一不是生物在进化的过程中为适应生存而形成的，无一不跟一定的功能相对应，语言的认知解释也是如此。正因为“认知语言学”的基本理论背景与“形式语言学”的基本理论是对立的，所以认知语言学的一些基本假设主要也就体现在与形式语言学理论的区别上面。(陆俭明·沈阳「认知理论与语言认知分析」より抜粋)

問 1 上の文を全て日本語に翻訳しなさい。(15 点)

問 2 下線部「形式语言学理论」について知るところを日本語で述べなさい。(10 点)

## 第二部分

設問 1 以下の文章を中国語に翻訳しなさい。(15 点)

テーマに即した研究方法を見いだすというのが簡単なようで難しい事だと思います。結局自分が何を知りたいのかを見いだす事が、最も労力を要する事でもあるからです。自分が何を知りたいか確認するためには、フィールドワークや面接など、質的な方法が非常に効果を発揮すると、私は個人的には思います。例えそれが論文の「結果」に載ることはな



くとも、自身がそのテーマに焦点を当てた背景となるデータは、必ず必要でしょう。質的研究は、分析とデータの収集が同時進行的でありながら、分析が研究のメインとなるという点が実験や調査と最も異なる点であり難しい所でもあります。なにかのパッケージソフトにデータを入れて、ソフトに分析をしてもらい、というわけにいかず、研究者自身がデータを写すプリズムとなる必要があるのがその理由でしょう。

**設問 2** 以下の文章を日本語に翻訳しなさい。(15 点)

文字は记录语言の书写符号系统。作为表意文字系统中的汉字，因其具有表音表意的双重属性，也就具有了书面语言的特征。汉字一字一音节，同时又具有一定的意义，即表示语言中的语素或词，这使得汉语中的字与语素（有些语素是成词语素，即本身可成词）大体上是一一对应的，因而我们就可以从汉字的形、音、义、性、能等各方面描述汉字的属性，而对这些属性的描述无疑会有利于汉语的信息处理。

### 第三部分

**設問** 以下の文章の内容を踏まえて、各自の意見・考えを 600～800 字程度の日本語で述べなさい。(30 点)

初めて本を刊行した（『歌を忘れてカナリヤが一奪われた言葉を追い求めて十年』文芸社刊）。当然、原稿は編集者の目にまず触れる事となった。さすがに文章の達人である。その指摘は私の文章の組み立て方を見抜いたものであり、改めて自分なりの方法で言葉を取り戻してきたこの十年の経過を振り返る事になったのである。

脳梗塞による失語症に陥ったのは十年前、完全失語という訳ではなかったが、障害が複合的なため、話の理解度も会話能力も非常に低く、社会復帰など望むべくもない有様であった。ところが不思議な事に、病前多少話せたドイツ語の文法はおぼろげながらも思い出す事ができ、それを縁に言葉を組み立て会話をしていたのである。しかし、いざ文章を綴る段になって、ドイツ語を意識したわけではない。無意識に、習得時留意したドイツ語文法に照らして作っていたようである。先の編集者の指摘は、正にそれを言い当てていた。言語と思考回路、ひいては理性や精神との繋がりに思い至った。

失語症に陥った状況の例えとして、異国へ行き言葉の通じない状態が挙げられる。それは確かにかなり苦しい状況であるが、失語症の場合それだけに留まるものではない。異国で言葉の通じない状況は、コミュニケーションには困るが、内的な言語（思考、判断、意志等）は保たれ揺るぎないのである。言語の役割とは単に外へ向けて発せられる情報伝達のみならず、それどころか人間存在の根幹ともなるべき内的な役割があり、この内的な役割により人が人たらしめられているように感ずる。コミュニケーションが難しい事ももちろん苦しいが、失語症患者としての実感を言えば、内的言語を失ってしまったことのほうが数倍苦しかった。多くの失語症患者もおそらく共感してくれるであろう。内的言語を取

り戻すため、私の脳内では迷路を行き交うようにインパルスが右往左往していたようである。その結果、先に述べたようなドイツ語の知識に頼る回路ができあがったのだろう。ドイツ語学者でもあるまいし、僅かなその知識さえ縁にしなければならないほど、私の脳の言語機能はやられており、無意識のうちにこの回路を使っているなら、私の思考さえもドイツ語に頼るこの回路に支配されているのであろう。

まだ失語症の酷かった頃、チンパンジー「アイ」の報道番組を見たことがあった。人間の言葉を理解し相手の要求に対する答えを出すことができるアイ。言語情報伝達能力は、少なくともその時の私より勝っていた。しかし、十年鍛えてもチンパンジーは人間のような精神は持てない。ほとんど同じ脳を持っているはずなのに。しかし、あの時チンパンジーより言語能力が劣っていた私は、十年かかり人間の精神を取り戻すことができた。正確さを欠く比較、そして表現に思われるかも知れないが、実感である。アイは残念ながら、理解はできても思考する内的言語能力はないのであろう。私は僅かながらも論理的に思考する内的言語能力が残っていた。

相手の話を理解できるようになるにつけ、それを思考し答えを発することも可能になった。また、発しないまでも一人論理的に思考しようとする試みは絶えず繰り返していた。こうして、徐々に言語を取り戻していったのだが、それはさながら脳の成長を追体験するようであった。人間は言葉に支配されていると実感した。ただ、アイに限りない親近感を感じたことも付け加えたい。それは決して自身の言葉の不自由さを、どこか彼女に重ねたからではない。アイとてまさか、森の中では人の言葉を理解するようにはなるまい。人との交流がある種の言語を習得させ、心の繋がりを可能にしたのであろう。彼女達に、言葉を超えての人間と同次元の温もりを感じ、言語は人間の絶対必要条件ではあるが、それだけでもないことを教えられた気もする。

もともと私は、ドイツ歌曲を専門とする歌手である。音楽というのも、そもそも人間の感情や精神の伝達手段であった。言葉に託し切れない部分の伝達手段として、音楽はかなり雄弁なものを持っている。しかしドイツ歌曲の黄金時代ロマン派は、詩との結びつきを特徴としている。詩というのは、どの形態の作品より言葉そのものが存在意義を持っているのではないか。その言霊を大切にしつつ、そこを超えて謳いあげているものを演奏していくのが、ドイツ歌曲の真髄であろう。失語症からやや回復し再び歌手として演奏するため、歌詞と言う名の言葉との格闘が始まった。改めてその存在意義を思い知らされる日々である。一方言葉を越えたものこそ、芸術を創造する人間という存在を息づかせているようにも思う。

失って初めて実感する言語の重さ。再認識する言葉を超えたものの大切さ。言語との格闘のあまりの過酷さに、たかが言語と思いたし、されど言語と思ひ知り。言葉を奪われて十年目の偽らざる心境である。

(原口隆一「たかが言語と思いたし…」)